

学校長挨拶（令和3年4月1日）

2021年4月1日、第10代防衛大学校長に就任しました久保文明です。どうぞよろしく
お願い申し上げます。

私はアメリカ政治史およびアメリカ政治の研究者および教員として、これまで筑波大学、慶應義塾大学、東京大学に奉職してきました。また、非常勤ながら日本とアメリカのいくつかのシンクタンクの研究業務にも関わってきました。海外での研究生活も5年以上に及びます。このような教育・研究活動での経験や成果を少しでも防衛大学校という新しい職場で生かせれば幸いです。

私が長年研究してきたアメリカ合衆国は、日本にとって唯一の同盟国であります。1830年代には白人成年男子の普通選挙を実施し、その結果で大統領を選出し交代させてきた長い民主主義の伝統があります。軍の歴史も長いですが、クーデターは起きていません。アメリカの軍幹部は最新の軍事技術と軍事理論を習得しながら、同時に人種やジェンダーなどでの多様性という課題にも積極的に取り組んできました。このような姿から、日本が、そして日本の自衛隊が学ぶべき点は少なくないと思います。

周知のとおり、防衛大学校は、1952年、その前身の保安大学校として発足し、2年

後に防衛大学校と改名されました。来年、創立 70 周年を迎えることとなります。多数の優秀な幹部自衛官を輩出してきた本校は、すでに高い評価を国内外から得ています。

それは、防衛大学校だけの功績というわけではないかもしれません。自衛隊についての評価が近年劇的に高まっています。それは多数の海外での平和維持活動に対する評価であり、また 2011 年 3 月 11 日の東日本大地震後の救援活動に代表されるさまざまな救援活動に対する感謝や評価でもあります。より本質的には、日夜厳しくかつ危険な訓練を続け、国民の安全を守るために備えている自衛隊全体の能力に対する信頼が、ますます高まっているためと考えてよいでしょう。国民に寄り添い、国民とともにある自衛隊に対する期待は、日本国民を守る存在として、近年、さらに堅固なものになっています。

日本が直面する安全保障環境が悪化するなかで、自衛隊に対する期待が高まっている面もあります。国民から頼られる存在であることは喜ばしいことではありますが、自衛隊自らが絶えざる自己変革を遂げて行かないと、急速に変化する国際環境に適確に対応できず、期待に応えられない可能性もあります。

防衛大学校における教育・研究においても、このような安全保障環境の変化について、十分留意しておかなければならないと考えています。これは、2021 年 3 月の本校卒業式での訓示において、菅義偉内閣総理大臣が指摘されたことでもあります。総理は、本年はソ連が崩壊した 1991 年から 30 年後であることに触れながら、自衛隊は、国連 PKO

などに代表される、1991 年当時誰も予測できなかった数々の任務を付与されたことを指摘されました。総理は、自衛隊はその変化に立派に対応してきたと評価されました。そのうえで菅総理が明確に述べたのは、「将来の変化に、的確に対応してほしいということ」でした。

かりに現在の自衛隊及び防衛大学校が 100 点満点の状態にあったとしても、現実が絶えず変化する以上、自衛隊も防衛大学校も常に変化することを余儀なくされています。

安全保障の分野では、周知のように近年は、宇宙、サイバー、電磁波などの分野の重要性が高まっていますが、一部の国はわが国よりはるかに先を走っていて、追いつくだけで、すなわち現実の変化に短期的に対応するだけで苦勞しています。

ただし、今の時点で 30 年後、40 年後に必要とされる自衛隊の業務や任務を適確に予想し、それをこの小原台のキャンパスで教えるのは、至難の業とあってよいでしょう。学問の基礎は古今東西あまり大きく変わっていないのではないかとも思えます。学生諸君がこのキャンパスで身につけるべきものは、今後直面しうるいかなる現実の変化に対しても、たじろぐことなく正面からぶつかっていく知的な強靱性と意欲・好奇心であり、また変わりゆく現実を柔軟に分析し適確に把握していく知的な基盤・基礎あるいは土台であります。

今から 30 年後あるいは 40 年後というのは、学生諸君が自衛隊の幹部となって組織を牽引している時であります。その時に、防大時代に教わった基礎や土台が何より有益

だったと評価してもらえよう、教職員の先頭に立って学生諸君の成長を支援したいと考えています。

菅総理は本年の卒業式訓示において、もう一点、「同盟国や友好国と積極的に交流し、信頼関係を構築してほしい」との希望を表明されました。これも総理のお言葉ですが、「複雑化する安全保障環境下では、もはや、どの国も、一国のみで自国の平和と安全を守ることはできません」と断言されています。アメリカ合衆国ですら、一国のみで平和と安全を守ることはできないということにもなります。むろん、わが国も同様です。わが国は今後、ますます同盟国との関係を強化するとともに、友好国を増やし、協力関係を強化していく必要があります。

現在、一方的な力の行使によって国際社会の現状を変えようとする国が散見されます。国民の命や領土を守るためには、不可避的にわが国も防衛力を強化し、備えを万全にしておく必要があります、同盟国との協力関係の強化はその延長線上にあります。すなわち、可能な限り数多くの国が結集して、一方的な力の行使による現状の変改は容認されないというメッセージを明確な形で発信することが必要であります。このような巨視的な動向を念頭に置きながら、本校としても、大学としてできる範囲で、同盟国・友好国との協力関係や交流を強化していきたいと考えていますし、それらの国々をより深く理解することも重視したいと思います。

最後になってしまいましたが、防衛大学校初代校長の榎智雄先生が常に力説していたのが、民主主義の時代における自衛隊のあり方を理解すること、とりわけ「民主制度に対する的確な理解」をもつことでした。言うまでもなく、自衛隊の使命は民主主義のもとで国民に奉仕し、国の独立・平和・安全を守り抜くことにあります。

近年、世界において民主主義の揺らぎが散見され、また実際に民主主義が崩壊する例すら見受けられます。そのような中で、わが国の民主主義に対しては、これまで以上に高い評価が与えられています。国民に寄り添い、国民とともにあろうとする、わが国における自衛隊のあり方自体、このような高い評価を構成する一要因であると考えられます。本校での教育においては、学生諸君に民主主義社会における自衛隊の使命と任務について、深く学ぶ時間をもってもらえるようにしたいと考えています。

もとより微力ではありますが、防衛大学校の一層の発展のために全力を尽く所存です。防衛大学校をさらなる高みに導くことができれば、私の喜びとするところです。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。